WaldrichSiegen 175年記念日 – 鍛冶工場が一流の工作機械メーカーに

ライトアップされたProfiMill五面加工機が落ち着いた景観なりました

1840年、ハインリッヒ・アドルフ・ワールドリッヒは小さな鍛冶工場をジーゲンのジーゲンヒュッテに設立しました。小さな工場から、WaldrichSiegenは重切削機械の世界的なリーディングカンパニーになりました。今年、我社は175周年を迎えました。

常時は最新鋭の重切削工作機械はバーバッハのプロダクション・ホールで作られていますが、2015年9月19日に、その場所でWaldrichSiegenの歴史と将来を祝うイベントが行われました。巨大なProfiMillは、WaldrichSiegenのCEOであるクリストフ・トマのスピーチにとって印象的なオブジェになりました。トマは激動の歴史の道標を称えました。175年の間、WaldrichSiegenは経済危機、戦争、インフレ、所有者の変更に打ち勝ち、常に成功への道を歩みました。「つまり、私たちは確信を持って将来を祝い見据えなくてはなりません。」スピーチの締めの言葉は、朗らかなお祝いの始まりの合図でした。1200人の来客、家族連れの社員、退職者、友人、ビジネスパートナーが異例なパーティーの雰囲気を楽しみました。

イベントのハイライトは経済ジャーナリスト、ケイ・バンダーマン司会の「中規模企業のオーナーマネージメントの世代交代」についてのパネルディスカッションでした。その他、政治経済のスペシャリストとしてよく知られている有名人、たとえばCEOやブレーメンの自由民主党の有力候補 Lencke Steiner、歴史家の Karl-Peter Ellerbrock 博士、ジーゲンの市長 Steffen MuesやWaldrichSiegenのCEOクリストフ・トマなどでした。

その祝賀会は魅力的で短い瞬間によっても特徴づけられました。明るい雰囲気の建物や、誇らしげにワークピースの置かれたプロダクション・ホールを通じて、ペアとグループの中で、従業員とその家族、同僚、顧客や友人たちが交流している様子が見られました。“land of fire“や子供向けのアクティビティは小さなゲストたちを楽しませました。ジャズミュージックに伴われて、人々はビュッフェを楽しみました。従業員の出身国の料理はそれぞれ違うブースで提供されました。

このイベントの別のハイライトは、ラップミュージシャン、Mohamed El-Chartouniの“WaldrichSong“とママの物語のパフォーマンスでした。ママの物語は1989年ロンドンから彼の家族がやってきた時のことを歌っています。マルティナ・トマとGökben Beyazgül 監修のもと、WaldrichSiegenの研修生によって撮影制作された„WaldrichSiegen – today and tomorrow“という映画のプレミアは喝采を持って迎えられました。

セレモニーはthe Evil Flamesのスペクタクル・ファイヤー・ショーで締めくくられました。しかしイベント後も遅くまでお祝いはづつきました。ゲストたちはみな、忘れられないイベントだったという意見で一致していました。

トピックス：

- 175年の祝賀パーティーの印象
- パネルディスカッション：成功した世代交代
- 映画：“WaldrichSiegen – today and tomorrow“
- 175年の道標

社説：クリストフ・トマ

2004年1月26日、WaldrichSiegen はHerkulesGroupの一員になりました。その時から、多くのことが変わりました。WaldrichSiegenを利益が出ていた頃に戻すために、至急に対策が取られました。再建策、経済的な合併、投資、新しい開発とシナジー、世界的な経済不況における連携などです。その当時、我々は危機に直面していました。しかし、あまり注文がない状況にも関わらず、我々は直近でいくつかのプロジェクトがありました。そして将来性を調査するためにちょうどいい理由がありました。

挑戦に勝つために、手段を変更する勇気が必要でした。我々は前に進み、改革し、再建し、相互作用を高める必要がありました。形式的な事柄の急進的な削減と再び中規模会社化する必要がありました。我々はペーパーレス化、Eメールの削減、より直接のコミュニケーションとグループ内でお互いの信頼を築く必要がありました。建設、製造、組立のために、能力をより集中し、顧客が優位に立つために、製造の相互作用を創造し、開拓する必要がありました。我々はより小さな機械とその部品全部を製造し、製造と部品の貯蔵の標準化を促進する必要がありました。

我々はすでにゴールに向けて重要なステップを踏んでいます。新しい世代の経営陣は現在著しく若返りました。そして世代交代をしました。我々は新しい社長でCOOとして優秀なエンジニア、マルコ・タナットを獲得しました。彼はこれらの変化を推し進める責任があります。ラルフ・チャーシャー、機械エンジニアリングの新しいマネージャーは、彼をサポートします。我々は素晴らしい研修制度と働きながら勉強する機会を与えることで、若い社員を丁寧にサポートします。また、スポーツと文化をサポートします。その一例は„Der Siegerländer Weg“計画であり、しっかりしたプロフェッショナル教育をアスリートに提供しています。

再建と変更はつねに素晴らしい挑戦をもたらします。一つの事柄は確かです。HerkulesGroupはミーリング、ターニング、グラインディング、テクスチュアリングをすべて扱います。我々は個々の会社でなく、グループ全体で、重切削工作機械のほぼ全ての範囲を提供します。WaldrichSiegenの175年の記念日は、会社の歴史の一つの道標です。私は確信します。これから25年後、WaldrichSiegenはHerkules-Groupの一員として200周年を祝うでしょう。

CEOクリストフ・トマ

パネルディスカッション
効果的な世代交代

ジーゲン市長のSteffen Muesによると、オーナー経営の中規模企業は彼らの分野の仕事での繁栄、安定性、安全な仕事を保証します。その理由は、常にエキサイティングな話題、世代交代です。経済学者のケイ・バンダーマンによって出されたパネルディスカッションでは、政治経済の分野でよく知られた参加者がこの問題を議論しました。

「中規模のオーナー企業で世代交代がどのように機能するでしょうか。世代交代が成功するために、必要な前提条件は何でしょうか。」CEOやShark Tankというテレビシリーズでよく知られたブレーメンの自由民主党の有力候補Lencke Steiner、ジーゲンの市長、キリスト教民主同盟のメンバー、Steffen Mues、歴史家Karl-Peter Ellerbrock博士、WaldrichSiegenのCEOクリストフ・トマは次の意見で合意しました。世代交代の挑戦は、リレーのバトンを渡す危険な瞬間と同じです。しかしながら、クリストフ・トマは述べました。「それは長距離のリレーです。短距離のリレーではありません。」走る途中で起こりますが、そのために訓練できません。なぜなら、一人一人の人間に一度だけ起こるからです。それは決められるべきで、確信を持って正しくあるべきです。」Karl-Peter Ellerbrockによると、必要な前提は次のようなものです。「変化への準備は、人々の精神で行われるべきです。」これは会社の中の変化に対してだけでなく、政治家、エコノミストが今直面している深層の変化に対してもです。これはこのディスカッションのトピックではありませんが、移民についてのディベートでも同様です。ビジネスパーソンは就労の禁止を厳しく批判します。移民は社会やジョブマーケットで融合すべきです。異文化間の多様性の問題は、我々にとって大きなチャンスです。そして、彼らは困難を切り抜けるでしょう。」パネルディスカッションの一致は次のようなものでした。時間と変化における質と価値です。Lencke Steinerは言いました。「もし両方の世代が、お互いに共存していたら、彼らはお互いの違い、つまり交差する世代への基礎を受け入れるでしょう。そこには成功した将来が横たわっています。」

表題：左から、パネルディスカッション中のSteffen Mues, クリストフ・トマ, Lencke Steiner, Karl-Peter Ellerbrock; Kay Bandermann

映画のプレミア：
WaldrichSiegen – today and tomorrow

輝く成功の歴史：会社の記念日のために映画を撮りました。それにもかかわらず、将来のためのプロジェクトになりました。映画のプロジェクトでは研修生が、将来へのヴィジョンを含め、会社を撮るべきであると、マルティナ・トマは会社の経営陣に提案しました。そして、プロダクションと建設のホールが1年間映画のセットになっている間会議室はシンクタンクになりました。

1人は切削機械のオペレーションのカリキュラムに属しながら、あらすじ、ト書き、演技、カットを手掛けました。しかしながら、WaldrichSiegenの若い人々に依頼されたこのプロジェクトが証明するように、自信を持って、創造的なアイディアを実行するチャンスでした。マルチナ・トマとGökben Beyazgülの指導の下、若い人々の経験する世界から、5つの映画が具体化しました。

彼らはWaldrichSiegen today and tomorrowでオリジナリティ、驚きなどの局面を強調しました。この研修生の貢献はそれぞれのシーンで見ることができます。この野心的なプロジェクトの完成はハードワーク、残業、多くの訓練を必要としました。その価値はありました。その結果は複雑で注目すべき会社のポートレイトです。研修生は俳優、監督、照明、カメラガイド、フィルム編集をやりました。彼らのアイディアはそのイベントを祝う観客に感銘を与えました。つまり、その場にいた人々は文化の多用性であり、伴にWaldrichSiegenで過ごし働く人々です。

研修生の撮影チーム、Gökben BeyazgülとMarita Thoma（間中）

印象的な175周年祝賀イベント

CEO クリストフ・トマとブレーメン自由民主党のリーダー
Lencke Steiner

The Evil Flamesのファイヤーショー

175周年の主賓：IHKのCEO K. Gräbener、バーバッハ市長
C. Ewers、ジーゲン市長S. Mues

WaldrichSiegenの社長兼COOマルコ・タナット。ステファニー・タナットとマルティナ・トマ

CEOクリストフ・トマ、マックス・アプロツサウザー、シュテファン・ヨースト

営業部長ハインリッヒ・ハウマー

175周年記念の映画プロジェクトのリーダーGökben Beyazgül

Dr. Benedikt Sitte博士、UnionChemnitzのCOOと社長

キッズ・プログラム

Achenbach BuschhüttenのCEO Axel Bartenと、Gabriele Barten博士

WaldrichSiegenの機械エンジニアリングのマネージャーR.Tschersche
RSGetriebeの社長兼COO T. Mehlhorn, Gontermann-PeipersのCEO F. Spannagel

Gontermann-Peipersのマネージング・ディレクターFritz Spannagel
とMichaela Helmrath-Arlt

HerkulesGroup Servicesの社長兼CEO、Andrea Billigと
Andreas Bongardt

Mohamed El-Chartouni, B.E. der Micathlet

ジャズトリオ Jacoustics

WaldrichSiegen –175年のマイルストーン

WaldrichSiegenがジーゲンの小さな鍛冶工場から重切削用工作機械のリーディングカンパニーになる前、WaldrichSiegenは戦争、インフレ、経済危機、オーナーの変更を経験しました。WaldrichSiegenの歴史は、真に迫った内容で、2016年の初めに出版されます。

会社の歴史を特徴づけるいくつかの出来事の概要は次の通りです。

1840 ハインリッヒ・アドルフ・ワールドリッヒがWaldrichSiegenを設立しました。

1879 ハインリッヒの死後、息子のハインリッヒ・アドルフ・ワールドリッヒJr.が会社を引き継ぎました。WaldrichSiegenはその当時小規模な会社でしたが、彼が製品の範囲を拡大しました。

1897 工場でロール旋盤が製造されました。

1906 オスカー・ワールドリッヒは父の会社に参加しました。会社はスペシャリストになり、製品の品質を最適化しました。ルールとザール地方に剛性のある圧延機を供給しました。

1914-18 第一次世界大戦勃発により、兵器の供給のために製造品を変更するように求められました。

1919 オスカー・ワールドリッヒは戦争の後、会社を一人で引き継ぎました。彼はロール旋盤とボーリング機械、平研削盤とロールネックミーリング機械の製造を続けました。

1920 製造範囲はロール研磨機まで広がりました。WaldrichSiegenはロール加工の国際的なリーディングカンパニーの一つになりました。

1944/45 第二次世界大戦の空襲がWaldrichSiegenの三か所すべての工場を破壊しました。

1949 非ナチ化の後で、オスカー・ワールドリッヒは会社を再建しました。

1951 初めての小さなミーリングマシンが製造されました。

1958 WaldrichSiegenはアメリカでは一般的であるパワフルな門型ミーリングマシンの技術を採用することに決めました。イリノイ州のロックフォードにあるインガーソル・ミーリングマシンとのジョイントベンチャーを開始しました。

1979-81 効果的で経済的な方法で製造するために、すべての製造工場は管理部門と同じバーバッハに移転しました。

2001 長年に渡る成功の後、利益の高い製造部門は流動性の供与のために売却されました。ほどなく、インガーソルはアメリカで債務不履行を申し立てました。ドイツのインガーソルグループに属していたWaldrichSiegen とWaldrich Coburgは売却されました。

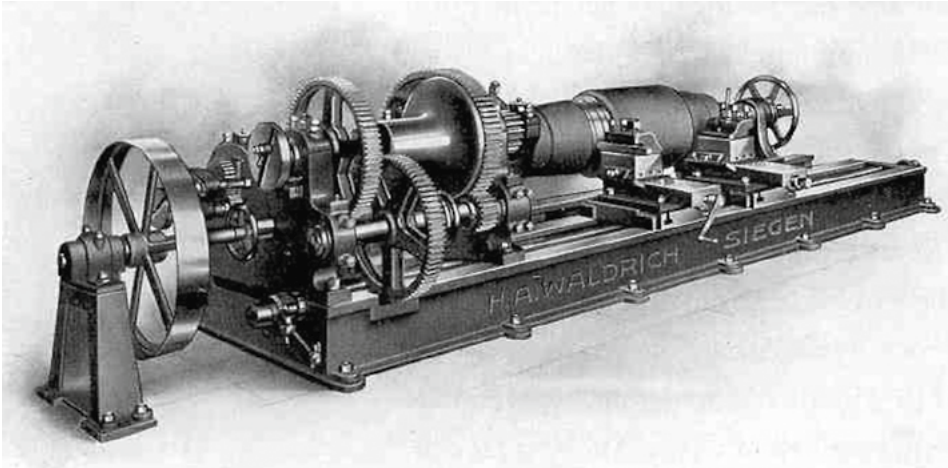
2004 同年 1月26日、ヘラクレスグループ社長兼CEOのクリストフ・トマはWaldrichの二社を買収しました。Waldrich Coburgはもう一度売却されました。WaldrichSiegenは再建後すぐに利益を出しました。合併後、投資の障害は克服されました。

2009 鋭いマーケットセンスと先見性により、社長のディトマー・ワイスとクリストフ・トマは新しいProfiMillの革新的な開発を進めました。

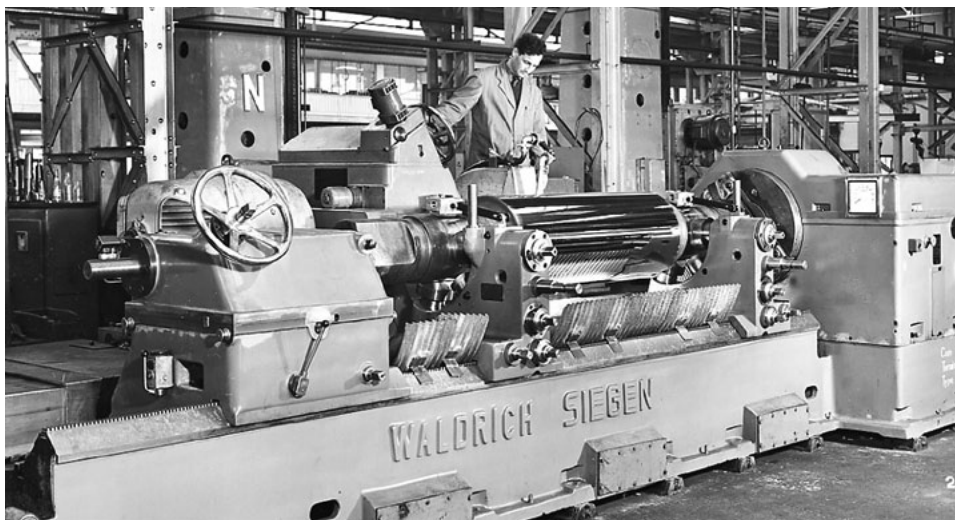
2011 WaldrichSiegenは製品の範囲を完成させるため横型中ぐり盤メーカーのUnion-Chemnitzを買収しました。

2013 立旋盤 ProfiTurn V は、重切削の範囲を完成させるために開発されました。今日、他のHerkulesGroupの会社との協力により、WaldrichSiegenは重切削用工作機械の完全な市場範囲をカバーしています。

2015 WaldrichSiegenは175周年を迎えました。



1900年頃のロール旋盤



1963年のロール研削盤

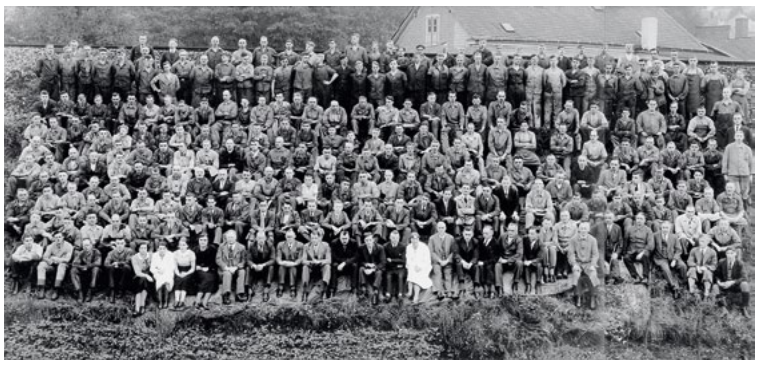
2014年の門型ミーリングマシン

歴史：
WaldrichSiegen の175年

卓越した手腕、勇敢な創設者、先見の明のある社長、革新的な技術者、有能なスペシャリストがWaldrichSiegenの発展と企業文化を形作っています。

そのヴィジョンとアイディアにより、彼らは先駆的技術を開発し、新しい市場とビジネスの分野を開きます。しかしながら、経済状況と変化は明らかにこの開発とWaldrichSiegenの歴史に影響します。

マルティナ・トマと経済ジャーナリストのケイ・バンダーマンは従業員と退職者に面接を行い、事実を確かめるため、書類や新聞、団体、経済的な資料を調査しました。彼らはWaldrichSiegenの175年という記念誌を2016年に出版します。


1933年のWaldrichSiegen社員

Mohamed El-Chartouni:
WaldrichSong

B. E. der Micathletとしても知られるMohamed El-Chartouniは人気のラッパーです。彼はジーゲンのアポロシアターでのプロジェクトの協力者としても知られています。
WaldrichSiegenの175周年の記念に、Mohamed El-Chartouniはその歴史と社員についての歌WaldrichSongを作曲しました。そのプレミアが175周年祝賀会で行われました。
Mohamed El-Chartouniは1989年、家族と一緒にロンドンからドイツに来ました。彼は4歳でした。彼はのちにこの話を彼の曲“Songs about Mama“で歌っています。

インプリント

WaldrichSiegen Communications

発行：2015-175年周年

発行者
WaldrichSiegen
Werkzeugmaschinen GmbH
Daimlerstr. 24 · 57299 Burbach
Germany
T: +49 (0) 2736 493-02
F: +49 (0) 2736 493-559

管理
HerkulesGroup Corporate
Communications Department
waldrichsiegen.jp